

[特集 研究・教育促進委員会主催 第一回教育セミナー報告]

家族看護の専門能力はいかに培われるか —専門看護師（家族看護）の教育から学ぶ—

司会 兼松百合子¹⁾ 内田 雅代²⁾

平成17年9月3日(土) 10:00~12:00 OVTA
レセプションホール渚において、第一回教育セミナーが開催された。参加者は90名で、約半数が教育機関のもの、30歳代・40歳代のものが約6割であった。

I. 目的とプレゼンテーションの概要

このセミナーは、家族看護の専門能力とはどのような内容のものであり、それはどのようにして培われるかについて学ぶことを目的とし、家族看護CNSコースの教育担当者と、その教育課程の修了生に話をさせていただき、参加者一同による討議を行った。発表内容は各発表者のページに詳述されている。2人の教育担当者の発言は、現在2つの大学院修士課程にある家族看護CNSコースの沿革とカリキュラムの概要であり、既存の理論を主軸としての展開と、わが国特有の家族看護ニーズを把握し、学生なりの考えや方法を構築するという2つの異なったアプローチが述べられた。いずれも実習を大事に、コミュニケーションやカンファレンスを重視し、教員が学生をサポートしている点は同じであった。2人の修了生は、理論的知識の習得とその事例への応用、実践しながら理論の振り返りと再学習、家族・スタッフ・教員・学生・友人の相互作用の中での学びが大きいことを述べた。また、知識に基づいた実践の自覚、どんな場面でも逃げない自信、新しい家族ニーズを発見できる能力が得られたとする一方、介入技術やアウトカム指標の開発の必要性が述べられた。

II. 討議の概要

会場での質疑応答では、実習分野は多様であること、変革者としての能力については、スタッフと学生の協働によるケアの変化、どんな場面でも逃げない自信ということ、事例を丁寧にアセスメントし介入方法を見出していくことにより示されるという説明がなされた。家族を捉える視点としては、家族全体を見る視点のほかに、成長発達していく存在、発病、急性期、退院などのステージ、疾患別、在宅などの状況といった視点があるのではないかというコメント、各専門分野の看護の対象としての家族と家族看護という専門分野との関係について発言が多くなされた。これに対して、家族看護は「この家族に何が起きているのか、現象の本質を見抜いていく力を必要とする。理解しコミュニケーションをとって関わっていく能力、統合する力、家族の関係性への援助が必要ではないか」というコメントがあり、「家族看護の専門能力とは？」を追究する糸口となると思われた。また、「実践の場で学生を育ててもらっている、実践者の協力、家族の協力による協働で可能になる」「自分なりの介入方法を見出すこと、面白いと感じ、家族から学んでいく。現象の中で家族がどうなっていくか、家族の力を引き出し発揮してもらい、CNSも成長していく」という発言は、前述の2人の修了生の発言とともに「家族看護の専門能力はいかに培われるか？」への答を導くものと思われた。更に、家族看護の専門能力とは何か、到達目標を示し、研究に繋げていく必要性、事例展開の中で看護師のどんな判断があったかを追究していかないといけないのでは

¹⁾岩手県立大学

²⁾長野県看護大学

ないかというコメントがあった。

III. アンケートの結果

参加者90名のうち、71名がアンケートに回答した。①大変よかった11名(15.5%) ②よかった44名(62.0%) ③どちらともいえない12名(16.9%) ④良くなかった1名(1.4%) 自由記載のみ3名(4.2%)であった。

「①大変よかった」と答えた人の自由記述の主な内容は、意見交換が興味深かった、私自身が家族看護実践者だということを忘れかけていた、基本となるもののきっかけがつかめたようだ、全国的な現状・動向がわかった、臨床・教育それぞれの方々の関心や実践の様子がよくわかった、臨床のナースはさまざま状況にあるがCNSの活動・存在を相互に活かせるようになればいい、以前から家族看護について興味があり今回のセミナーで理解できた、家族看護に対する意欲が湧いた、であった。

「②よかった」と答えた人の自由記述の肯定的な内容は、教育の立場の人と教育を受けた立場の人の話は臨床で教育・指導を行っている自分の悩みと似ていて共有できた、CNS教育の深さを知った、修了生の現場での活動を窺い知ることができた(具体的にないにしても)、教育と実践がつながっていると感じた、CNSコースでの2年間の教育の到達度が理解できた、がん・母子などと違った考え方で新鮮だった、CNS修了生のプレゼンテーションはとてもよかった、何が身についたのか良くわかった、家族への支援のプロが沢山いれば救われる人は多いと思われるので大切だと思う、であった。否定的内容・要望は、家族看護のCNSの役割が結局明確にならなかった、具体的事例が欲しかった、家族看護の知識がない者としては“家族看護実践における知識・技術”を取り上げて欲しかった、であった。

「③どちらともいえない」と答えた人の自由記述は大部分が否定的内容・要望であり、参加者の求める

ニーズと発表内容がかけ離れていた。知りたかったことは一般の家族看護の展開と専門的な家族看護の展開は何が違うのか、教育プログラムの内容と学生が実習していく過程をもっと詳しく話して欲しかった、実習中に学生が病棟スタッフとどのような関係をもつ事が家族・病棟スタッフに良い影響を与えるのか具体的に聞きたかった、であった。

「④良くなかった」と答えた1名の自由記述は、具体的にどのような実力がついたのでかわからなかった、であった。

IV. おわりに

今回、家族看護について、最も先駆的かつ高度な教育プログラムと考えられている家族看護CNSコースにおいて、どのような教育が行われているのか、教育する立場と、教育を受けた立場から述べていただき、家族看護の専門能力とは何か、それはどのようにして培われるかを学ぶことを意図した。その結果、家族看護についての一般的な情報を求めてきた参加者のニーズには合わないものであったと思われる。家族看護の教育や実践により深く関わっている参加者にとっても、具体的な事例による検討の部分があれば、より理解しやすいものであったのではないかと思われる。このような反省はあったが、2大学院における家族看護CNSコースでの7年余の真剣な取り組みを公表していただき、その修了生の学びや現場での活動を示していただいたことの意義は大きい。発表や討議の中で、前述のごとく、家族看護の専門能力とその教育方法についての示唆が得られていると思われる。今後、修了生が実践現場でスタッフとともに、どのように看護の実践を展開していったか、また、困難な要因は何かなど、具体的な事例を集積することにより、各専門分野での家族の看護と家族看護という専門分野との関係も明らかになってくるのではないだろうか。家族看護CNSについての理解を深め、支援の体制をより充実することが望まれる。